いわさきちひろ——昭和を生きた画家

執筆者：竹迫　祐子
掲載誌：展覧会図録「いわさきちひろ展——未来へつなぐ　やさしさのために」
2011年4月27日　松坂屋美術館

髪を結い上げた母親の首にキュッと抱きついた男の子。後ろ向きのお母さんの顔は見えないが、安心しきって頬を寄せる男の子の表情が、母と子の日常の幸せを余すところなく伝えている。

たっぷりと水をふくませた太い筆をさっと動かし、絵の具のにじみ広がった先の境界線で輪郭をとらえる。淡い色彩で描かれた母親の背中は、細部が省力され、大胆にのこされた余白とともに、後年のいわさきちひろの特徴、描き込まず見る人の想像に委ねるという絵画表現が、代表作「母の日」には凝縮している。同時に、この絵からは子どもを描き続けた画家の、子どもを見つめる母ならではのまなざしと感覚がうかがえる。

*

いわさきちひろは、1918(大正7)年12月15日に生まれ、大正デモクラシーの風が吹くなか、その豊かな文化を享受しながら子ども時代を過ごした。日本が戦争へと突き進んで行く時代に青春を送り、戦後、画家として、子どもの本の世界で活躍するが、この国が復興再生から急速な経済成長を遂げつつあった時期、1974(昭和49)年に55歳という若さでこの世を去った。その生涯は、激動の昭和という時代と重なり合っていたとも言える。

軍属の娘として育った恵まれた少女時代。封建的な家族制度の犠牲とも言える不幸な結婚。戦争中、満州と呼ばれた中国での二度に渡る生活。それらを経ての画家としての自立と葛藤。国会議員の妻として、大家族の主婦として、そして、ひとり息子の母としての多忙な日々。それらすべてを包み込み、昇華させて、いわさきちひろの絵は生まれてきた。

恵まれた子ども時代

信州の梓川村出身で陸軍の築城部の建築技師であった父と、松本市出身で女学校教師であった母のもと、ちひろは三人姉妹の長女として恵まれた環境の中で育った。ちひろが生まれた1918年は、第一次世界大戦後の戦勝景気が一方で米の高騰を生み、生活に苦しむ人々による米騒動が起こった年であり、同時に、鈴木三重吉が童話童謡雑誌「赤い鳥」を創刊した年でもある。大正デモクラシーと後に呼ばれ、ヨーロッパの新しい芸術思潮が一挙にもたらされたこの時期、子どもの本の世界でも自由で創造的な文化がたくさん生み出された。中でも、絵雑誌「コドモノクニ」は岡本帰一、武井武雄、初山滋といった童画家たちを輩出し、そうした画家たちの美しく独創的な絵は、画家いわさきちひろの原点となる。

しかし、やがて訪れる昭和という時代、日本は戦争へと歩みを速めていく。絵が好きな少女は、美術学校へ進むことを夢に見るが、三人姉妹の長女にとっ

て、本人の意思とは別に、家のため婿養子を迎えての結婚は逃れることができないものであった。どうしても心を通わせることができないまま、夫の自殺という結末を迎えた不幸な結婚。夫の任地であった中国・大連、未亡人となったちひろが再度、女子義勇隊訓練所の書道教師という名目で渡ったソ満国境近い中国・殁利。さらには、敗戦直前、1945年5月25日の東京空襲での被災。戦時下のちひろは、後にどう生きるかを決定づける過酷な体験をする。

画家としての自立

敗戦の翌年1946(昭和21)年の5月、いわさきちひろは画家を志して疎開先の信州・松本から単身上京した。戦争の傷跡も深く廃墟となった東京で、挿絵も描く新聞記者として仕事をしながら絵を学び、自立の道を歩みはじめる。

戦争が終わり、取り返しのつかない程の犠牲を払って、日本は二度と戦争をしないことを新憲法に誓った。子どもたちは、平和の意味と尊さを教わる。戦後のベビーブームを迎え、町は子どもで溢れていた。実際、14歳以下の子どもの数を比較すると、2010年がおよそ1700万人たらずであるのに対して、1947(昭和22)年には2760万人、1955(昭和30)年には2980万人近い子どもがいた。*1　ちひろが画家として活躍しはじめたのは、まさにこの時代。次代を担う子どものために、優れた教育と良質の文化が求められ、子どもの本への期待も高まっていた。まさに、時代がちひろを求めていたと言える

妻、母、画家としての日々——昭和の暮らし

1950(昭和25)年、自らの意思で両性の合意に基き、若きコミュニスト松本善明と結婚。翌51(昭和26)年4月、母となったちひろは、以降、わが子をモデルにたくさんの子どもの絵を描きはじめる。乳飲み子の頃には、一時期、仕事のために子どもを信州の両親のもとに預け、ようやく親子三人の生活がはじまってからは、絵筆を幼い我が子のお漏らしを片付ける雑巾に持ち替えての日々であった。はじめて手がけた絵本『ひとりでできるよ』の、青いつりズボンの男の子とお姉さんのような女の子は、長男の猛と幼馴染みのように育った姪の明子の姿を彷彿させる。当時、子どもの本では、行儀よく可愛い子どもが描かれることが多かったのに対して、ちひろはわが子やその友だちをモデルに、いっときもじっとしていない子どもを、リアルに描いて読者の共感を得た。

この時代、暮らしは未だつましいものだった。洋服はお下がりが当たり前だったし、古いセーターは毛糸を解いて湯気にあてて再生し、いくつかのお古を彩りよく組み合わせて子どものセーターやベストに編みなおされた。子どもたちにも、靴磨き、薪割りや風呂焚き、料理の手伝いや買い物など、家の仕事があった。そんな仕事の合間を縫って、子どもたちはよく遊んだものである。おもちゃがなくても、空き地をみつけ、空き缶や石ころで遊んだ。あやとり、折り紙、ままごと、はないちもんめ、かくれんぼや鬼ごっこ、陣取り、縄跳び、缶蹴り、木登りと遊びに事欠くことはなかった。

大人たちは節約して、少しでもよいものを子どもに着せ、少しでもよい教育や文化を与えたい、と懸命に働いた時代。自分が子どもの頃には見たこともないような美しい絵本を与え、子どもの喜ぶ姿に胸を膨らませた。

1950年、不幸にも隣国で起こった朝鮮戦争が特需をもたらし、日本は奇跡と

いわれた経済復興を遂げる。生活も少しずつ豊かになっていく。ちひろの絵の中の女の子たちも、お洒落な洋服で登場してくるようになった。
ちひろはいつも、絵の中の子どもたちにどんな洋服を着せるか心を砕いている。シンプルでモダンなデザイン、シックで美しい色彩。描かれた子どもたちの姿には、ちひろ自身のファッション・センスがよく出ている。
経済の発展は出版の世界にも影響を与え、子どもの本の市場を拡大させるとともに、印刷技術の飛躍的な進歩を実現させた。それまでは難しかったちひろの繊細な色調の滲みやぼかしの表現も印刷が可能になった。時代がちひろを後押しする。それまで絵本の主流であった“物語に絵を描くという絵本作り”から、“絵そのものがストーリーを展開する新しい絵本作り”にちひろは挑戦する。自身の幼い頃の呼び名“ちいちゃん”を主人公とする至光社の絵本シリーズは、少女の短いつぶやきと絵が物語を運ぶ斬新な取り組みであった。

ちひろの願い

ちひろが完成させた最後の絵本『戦火のなかの子どもたち』は、一場面一場面が異なるストーリーを持ち、絵とわずかな言葉から読者が想像していくという全く新しい表現形態の絵本である。絵本表現の可能性を広げたという点からも、また平和を願って戦争を描いた明確なテーマ性からも、この画家を最も顕著に語るものとなった。
戦後の急速な復興や経済発展は、次第に戦争の記憶を遠いものにしていく。そんな中、1964(昭和 39)年のトンキン湾事件をきっかけに本格化したベトナム戦争は、日本の米軍基地からアメリカ軍の飛行機がベトナムに飛び立っていくということもあって、世界の動きに連動して日本からも反戦の声が次々に上がった。
自ら戦争体験を持つちひろは、戦争の最大の犠牲者が子どもであることを実感していた。1967(昭和 42)年、深刻化するベトナム戦争の中、若い世代に戦争の実相を伝えようと、被爆した子どもの画文集『わたしがちいさかったときに』を描く。その後、ベトナムの作家の物語絵本『母さんはおるす』を描いた後、病を押して『戦火のなかの子どもたち』の仕事に取り組んでいった。

未来への希望

「どんどん経済が成長してきたその代償に、人間は心の豊かさをだんだん失ってしまんじゃないかと思います。(中略)　私は私の絵本のなかで、今の日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。それを子どもたちに送るのが私の生きがいです。青年たちは若いだけに、もっと大きい生きがいをもてるはずだと思います。世の中がいくらみにくくても、それにうちかつ生きがいは、若者のなかにこそあると思います」。*2
経済の発展と引き換えに急激に変貌する状況を憂いてこう語った。この言葉が示すとおり、いわさきちひろは社会の現実を冷厳に見つめつつ、また、決して希望を失うことのない人だったと言える。描いた作品はおよそ 9500 点。残した本は 40 冊余り。生涯、子どもを描きつづけたこの画家の根底には、その半生を通じて到達した「世界中のこども　みんなに平和としあわせを」という言葉に象徴される、揺るぎない願いがあった。

その絵は、いつの時代にも変わることのない真実、子どもは愛らしく、愛さずにはいられない存在であり、私たちの未来は子どもたちの中にこそあると、今も静かに語り続けている。

＊1　総務省統計局「人口推計」

＊2　対談「人生手帳」文理書院（1972年）